

協会ニュース 鳥居駒吉		【鳥居洋(曾孫)・瀬島正司】		
	2011年(平成24年)	10月号(185号)	瀬島正司	鳥居駒吉の足跡があった
1	2011年(平成24年)	4月号(179号)	鳥居洋(曾孫)	鳥居駒吉 伝<1>
2	2011年(平成24年)	4月号(179号)	鳥居洋(曾孫)	鳥居駒吉 伝<2>
3	2011年(平成24年)	5月号(180号)	鳥居洋(曾孫)	鳥居駒吉 伝<3>
4	2011年(平成24年)	6月号(181号)	鳥居洋(曾孫)	鳥居駒吉 伝<4>
5	2011年(平成24年)	7月号(182号)	鳥居洋(曾孫)	鳥居駒吉 伝<5>

2011年10月号(185号)

*鳥井駒吉の足跡があった

[瀬島正司]

思いがけないところに、鳥井駒吉の足跡がありました。鳥井駒吉は 1853 年(嘉永 6 年)～1909 年(明治 42 年)の堺の有名人物の一人で、酒屋を営み、わが国最初のビール製造工場(現アサヒビール)を興し、これも日本最初の民間鉄道会社である、現在の南海電車を創設し、他にも数々の事業を興して成功させた人物であることは、皆様お馴染みでしょう。

詳しくは、協会ニュース平成 24 年 3 月号～7 月号の<トピックス>をご覧ください。鳥井駒吉の曾孫である、鳥井賛助会員の「鳥井駒吉伝」が連載されています。閑話休題、上記「鳥井駒吉伝」の作者、鳥井賛助会員の案内で江久庵を訪ねてみました。江久庵の裏側、反正天皇陵を望む庭には有名な茶室「朝雲庵」が建っています。朝雲庵の待合の向こう、庭の南東の隅に 3 メートル余りと見える石灯籠が建っていました。これが、鳥井駒吉の「娯観家」にあった石灯籠だそうです。「娯観家」のことを忘れていた方の為に本文を引用してみます。(協会ニュース平成 24 年 6 月号、19 ページの鳥井駒吉伝、[駒吉の生活] 部分の 1 部です。)



——また、駒吉はその母「おゑい」に気を配り、病を患った母の為に大小路の角に「娯観家」を建てて、女中、下男、看護師としての中老女が 2 人、奥村さんと言うマッサージのかたわらお相手をしてくれる老女を置いた。——大きな石燈籠を支える竿の下にある蓮華紋のような反花、その下の 2 段ある六角形基壇の上部各辺に 1 頭ずつ、酒屋のブランドである「春駒」の馬達が躍動しています。中台と呼ばれる火袋と竿の間の連弁の上部にも六角形の各辺に 2 頭ずつの「春駒」が疾駆しています。そして、竿の真中を区切る節(珠紋帯)の下には「娯観之式」(娯観は読めるが後の 2 文字は間違いかもしれない)と記されている。後ろの 2 文字が間違いなければ、何處かに「娯観之壺」があるのではないかと、夢が膨らんできました。



鳥居駒吉

[鳥井 洋 (曾孫)]

[始めに]

駒吉は嘉永 6(1853)年 3 月 12 日、三代目和泉屋伊助及び妻ゑいの次男として、和泉国堺「宿院」に生まれた。入婿であった和泉屋伊助は本家の嫡子である伊六に米穀仲買商を譲り、伊助一族は住まいを「甲斐町」に移した。

文久元(1861)年、酒造業を大和屋善兵衛からひきつぎ、この時に銘柄を「春駒」にした。駒吉 10 歳のころだった。駒吉は市之町西一丁にある寺子屋、中川清蔵方へ通って勉学に励んだ。書家として名高い、恩師の清蔵でしたが、その清蔵でさえ、駒吉の一を聞いて十を知る程の才能に敬意をはらう程であった。



[日本酒に関する仕事]

駒吉は、明治 3 年(1870)、17 歳で父と死に別れ、実家である酒造業を継いだ。銘柄としては、「春駒」、「鳥井」であった。駒吉は、最初は慈母の指揮命令に従いつつ酒造業を習得していった。「春駒」の売れ行きは順調であった。明治 12 年(1879)、酒造業の各店から推されて、27 歳という若さにもかかわらず、堺酒造組合長に推されて就任した。



組合長に就任してから間もない明治 16 年(1883)、堺の同業者である宅徳平等と戎島 2 丁に堺精米会社を設立した。蒸気機関を使った機械で米を精米し、各店がある程度、安定した質と量のお酒を出せるようにした。また、農商務省の技師であった肥田密蔵を招聘し、より良いお酒を醸造するためのいろいろな研究を始めた。この一環として明治 19 年(1886)には、醸造にかかわる人たちの訓練・勉強の場として、堺醸造改良試験所が設立された。おかげで、各店で行っていた「杜氏」候補生の教育に必要なエネルギーと時間が効率化された。

明治 20 年(1887)、堺共同醸造所(神明町西 1 丁)を設立し、堺醸造改良試験所で生まれたアイデアで造られた酒を多くの人々に味わってもらった。その翌年、堺酒造株式会社へと名称を変え、駒吉は取締役になった。引き続き、明治 21 年(1888)にバルセロナ万国博覧会(スペイン)に瓶詰の清酒を出品し、日本を代表する粋のいい、美味しい飲み物としての名声を勝ち取った。駒吉は、ここに清酒の取り扱いに関する一大革命ともいえる、瓶詰用として清酒を濾過するという技術も開発した。ついで明治 22 年(1889)にフランスで開かれた万国大博覧会においても銀賞を獲得した。また、明治 25 年(1892)には、北米合衆国閩龍世界大博覧会においても名誉賞を得た。海外への販路も、清国、アメリカ、ハワイと幅を広げてゆきました。国内でも、沢山の博覧会・品評会などに出品し、一等~三等、金牌、あるいは名誉賞に輝いた。



明治 25 年(1892)、日本酒を初めて瓶詰として売り出し、明治 26 年(1893)に義弟鳥井辨六、実弟鳥井亀吉を加え、鳥井合名会社を設立した。銘柄は「春駒」、「鳥井(井桁に鳥)」、「旭山」、「大出来」、「浦島」の 5 銘柄となった。そのうち、辨六は早期に亡くなったので実弟の伊作を入れ、駒吉が社長となって、「春駒」、「大出来」、「浦島」の販売を重点的に行った。この合名会社は、当時、最も進んだ経営法であった。

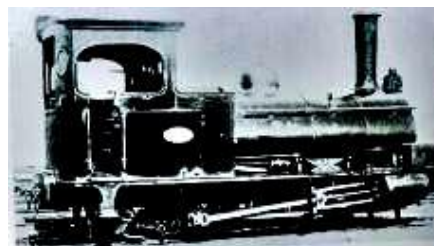
駒吉は、火災の被害に遭った同業者が、その後立ち直れない状態に陥るのを見て、他の同業者たちを

説き、明治 25 年(1892)、火災救済同盟会を組織した。これが明治 30 年(1897)に酒造火災保険会社となり、駒吉は副社長になった。明治 27 年(1894)には天皇皇后両陛下御結婚 25 周年の御慶典にあたり、堺酒造組合は鳥井合名会社のお酒を選び、これに「国酒」と命名し、献上した。更に、明治 33 年(1900)には皇太子殿下御婚儀に際し、この「国酒」を再び献上した。

このように鳥井合名会社はその事業を拡張するとともに、粗製濫造を深く慎み、精製改造の方針をとり、明治 30 年(1897)頃には全国でも「春駒」の商標を知らないものはいないとまで言われるほどになった。

[鉄道事業に関する仕事]

明治 10 年代半ばを過ぎると、社会の進歩と発展につれて大阪～堺間の往来が頻繁になって来た。駒吉は今後の事業の進展を考えると、近代的交通機関が是非必要だと思えた。そこで彼は阪堺電鉄の設立に参画し、堺の宅徳平、大塚三郎平等、大阪の藤田傳三郎、松本重太郎、外山脩造等総勢 19 名からなるグループを作り、明治 17 年 2 月に「大阪堺間鉄道布設願」を大阪府知事宛に提出した。



同年 6 月には、会社存続の許可起源は 50 年で、30 年後には政府の都合によって相当代価で買い上げる権利を留保する等付帯条件が付いていたが、本決まりとなった。

明治 18 年(1885 年)に駒吉は取締役役に就任し、明治 21 年(1888 年)5 月に阪堺鉄道が大和川を渡り、堺まで通じ、難波～堺間が開通した。それに応じて業績も尻上がりによくなった。一方、明治 22 年(1889 年)堺の停留所から南進し紀ノ川に達する紀泉鉄道が設立され、翌年阪堺鉄道との合併が成立しかかっていた。明治 27 年(1894 年)7 月に設立発起認可と鉄道敷設仮免許状がおりた。更に、同年、紀摂鉄道が南陽鉄道に、さらに南海鉄道と改称した。阪堺鉄道と南海鉄道は合併し、明治 31 年(1898 年)、南海鉄道株式会社になった。駒吉はこの時も南海鉄道の取締役であり、松本重太郎の片腕として彼の才能を発揮した。明治 36 年(1903 年)に難波～和歌山間が開通した。駒吉は明治 37 年(1904 年)6 月に南海鉄道の 2 代目社長となり、翌明治 38 年(1905 年)、難波～浜寺間、天下茶屋～天王寺間の電化を申請した。

明治 40 年(1907 年)4 月、南海鉄道株式会社の社長を健康上の理由により辞任し、監査役に就任した。しかし、この時でも 4 月には 19 名の運転手・車掌見習いを若手教育の一環として他社(阪神電鉄)で 3 ヶ月の教習を受けさせている。また、8 月には難波～浜寺公園間の電化工事も完成し、電車 9 両を新しく造った。そのうえ、住ノ江に火力発電所を設置し、大正 7 年(1918 年)10 月まで使用した。

[アサヒビールに関する仕事]

1880 年代後半(明治 20 年代)日本国内のビール消費量は急速な伸びを示した。反面、日本酒の出来高はデフレ、酒税の上昇、洋酒の流行などがあって、減収に陥っていた。そこで、駒吉は旺盛な需要があり酒税の対象にならないビールに着目した。ここで会社設立の為にはビール醸造に関する技術の取得、製造設備の調達、経営面での調査などがあるが、これらの任務にあたったのが生田秀(いくた ひいず)であった。

彼は安政 4 年(1857 年)10 月 9 日に佐渡国雑太郡新町村(現:佐渡市真野新町)に生まれた。父は地元で代々開業する漢方医であった。医学校を目指し明治 6 年(1873 年)に上京した彼は同郷の先輩で医学校の教授でもある司馬凌海に師事したが、東京外国語大学でドイツ語を習熟し、医学校への進学を断念し、内務省衛生局の技師となった。生田は内務省司薬場(後の衛生試験所)で薬の検査や試験などで化学分析の実務を積み一方、ドイツ語の能力を生かして「定量分析法」等化学専門書の翻訳も行った。

生田が大阪麦酒会社の「製造一切ノ技術ニ従事スル」こと「製造技術上ノ全権ヲ委付スヘ」等の雇用契約を結んだ中に、海外留学(ビール醸造法等の習得)の条文も含まれており、生田に対する期待はかなり大きかった。生田は明治22年(1889年)4月に神戸を出港し、5月28日にドイツに着いた。そこで海外研修し、明治23年(1890年)3月「一醸造所ヲ指揮監督スルノ資格アル事ヲ証明スル」の学位免状を与えられ、その後、デンマークのコペンハーゲンに行き、酵母の純粹培養法などを学び、醸造用酵母11株を購入し醸造設備の模型と共に持ち帰った。国内では醸造所の用地は販売上のメリットを考慮して近畿地方とし、千里丘陵の地下を伝わり吹田の泉殿宮(いずどのぐう)へ湧き出す水をミュンヘンに送ったところビールに適した水であるとの返事があった。その上、明治9年(1876年)に東海道線の大阪～京都間の開業と共に吹田停車場が開設され、明治22年(1889年)7月には東海道線の全線、新橋～神戸間が全通していたので、ビールの製品、原料、資材の運搬に力を発揮することが期待された。更には、神崎川に面した水運も含めて、大阪麦酒会社のビール醸造所は吹田村に決定した。

明治22年(1889年)11月5日に有限責任大阪麦酒会社を創立して駒吉が社長に就任した。その他、創立には松本重太郎、外山脩造、石寄喜兵衛、宅徳平等がいた。大阪麦酒会社の創立は本格的ビール事業への挑戦という意味では画期的なものであった。醸造所の建設は生田が帰国して約一年後に始まり、翌年の明治24年(1891年)秋に完成し、12月には33石(約6kl)の仕込みを行い、ビール醸造が始まった。明治25年(1892年)5月に「アサヒビール」の商標登録を済ませ、全国に向けて販売を開始した。明治26年(1893年)に大阪麦酒株式会社に改組した。明治26年(1893年)にアメリカとカナダの共催によるコロンブス世界博覧会に「アサヒビール」を出品し、最優等賞を得られたのを始め、ほぼ毎年国内外の博覧会・品評会に出して、有功章一等～三等などを得た。

明治37年(1904年)から起った大阪麦酒、札幌麦酒と日本麦酒の合併問題がこじれたが、結局、株比率が大阪麦酒1：札幌麦酒1.5：日本麦酒2で合意され、合併に至った。新会社は大日本麦酒株式会社と呼ばれた。また、ビール事業とは直接関わりはないが、有馬の炭酸水に素早く目を付け、明治34年(1901年)に「有馬鉱泉」を設立し、炭酸水を瓶詰にして海外を含む全国に販売した。7年後(明治41年)には、この炭酸水に甘味料や香料を加えたものが「有馬炭酸鉄砲水」として売られた。

〔駒吉の信条〕

駒吉の生活および商売での基礎は、「①信用、②資金、③通貨」であるとし、仕事にこれが生かされて行く。更に彼の信条は、「信、為萬事本(まことこそ、ばんじのもとになり)」であった。これで明らかのように、仕事、生活の上で信頼、信用が第一であるとしており、現在でも通じることである。

〔駒吉の生活〕

駒吉は日本酒、鉄道、ビール、火災保険、銀行などに幅広く出資し、すべてで取締役～社長に選ばれており、企業の中の人として頭角を表しているが、家庭ではどうであろうか。駒吉は次男であるが、長男は早世していたので、一家を背負い家業を繁栄させなければならなかった。駒吉には4人の弟妹が居たが、駒吉自身は日本酒の蔵元で「春駒」の醸造元を、17歳という若さで継いだ。次女「かね」には入り婿(辨六)をとり、南店として立派に立たせ、三男の鶴松には島谷家への養子として入籍し、後の島谷安三郎を名乗らせた。また、4男伊作と5男亀吉には本家である和泉屋に嗣子が無く、伊作は本家の鳥井へ、亀吉は新宅の鳥井へそれぞれ入り婿として、鳥井一族の家計を守った。また、駒吉はその母「おゑい」に気を配り、病を患った母の為に大小路の角に「娯観家」を建てて、女中、下男、看護師としての中老女が2人、奥村さんと言うマッサージのかたわらお相手をしてくれる老女を置いた。駒吉は家にいる時は朝夕ご機嫌をお伺いしており、ある都市の節分には「両の手に余る親子の年の豆」と詠んだことから、母に対する両の手に余る思いやりがうかがわれる。年中行事としては、先

ず元旦には、各一統内の主人たちは未明に定紋の馬上提灯で道を照らして酒場(駒吉家)に参集し、菩提寺である最勝寺の院主を招いて、共にご仏前で読経の後、祝の膳に座り、御屠蘇をくみ、御雑煮を食べてお祝いした。その後各主人たちは帰り、家族、店員、女中を始め、ご仏前に礼拝の上、新年をお祝いした。十日戎の頃には、あげ初めと言って、新酒の出来上がりを祝う行事があり、落語家や手品師を招いて興を添えた。父親伊助の命日である1月22日には新酒の粕を用いて、粕汁を食べたりした。また、駒吉の厄年の冬至には「娯観家」へ知人を招き、2,3日饗応が続き、瓶詰場ではおぜんざいが振る舞われた。

このように駒吉は身内だけでなく、社会全体に対して気を使った。彼は21歳にして皇城炎上に献金したことを始め、小学校の資金を寄付し、堺波止場の増築に、鹿児島市街の火災、和歌山県下での洪水、奈良県下での水害、岐阜・愛知県下の震災、北海道での水害など種々の救済協力をし、社会全体への気配りはいろんな褒賞で裏付けられ、駒吉の心優しい寄付が堺のみならず日本全国に現れている。



[神仏とのかかわり]

駒吉は明治24年(1891年)8月に伊勢大廟神苑会の会員となり、明治27年(1894年)6月には、酒の神様である松尾大社の松尾神苑会の幹事を依頼された。住まいの近くの開口神社には一碑を建て、重野博士にその文を託した。方違神社にも「三国丘」の碑を設け、その裏には「耳原に 来て鶯の 初音かな 半静」の短歌が残っている。大鳥神社には標柱を献じた。また、奈良県にある長谷寺へは、亡き父の遺志を継ぎ25回忌に当たる明治27年(1894年)2月に親戚である鳥井伊平、鳥井伊作、鳥谷安三郎らと友人である宅徳平、肥塚與八郎、大塚三郎平その他友人を集め、亡父の念願であった長谷寺入口から仁王門に至る参道を石畳に変えた。同年5月に追悼の法要を長谷寺で営み、祖先の霊を敬った。



この一連の行事については長谷寺の仁王門に向かって左側に、石碑に書いて献上している。体を悪くして「娯観家」で養生生活を過ごしたときは、日の出とともに開口神社参拝に行き、その足で本家である宿院にある和泉屋へ立ち寄り、御仏前へお参りをしして帰ったほど、神仏への帰依は深いものがあつた。

[終わりに]

駒吉は明治21年(1888年)堺の酒造業者、宅徳平、肥塚與八郎、大阪の紳商(品格と地位を備えた上流の商人、大商人、豪商)の松本重太郎、田中市兵衛らと共に茅海樓の近隣に「旭館」を作り、政府の高官や一流の紳商との交友を深めた。姪のせんによれば、せん達一族はよく「旭館」で土筆をつんだりして遊んだことが記載されている。「旭館」が国道26号線で両断され、その役目を終えるときに、そこにあった蘇鉄は堺市へ寄贈されて、それは今も堺市役所の玄関を飾る大蘇鉄となっている。駒吉は自ら温容洒脱を心がけ、お正月には「善きことを 聞くや卯年の 初便り」とか、冬の寒いときには「朝寒に 出した火桶の 馳走かな」などと詠いあげ、短歌に秀でていたことがわかる。また、茶道は千家表流免許皆伝を授けられ、書画にも堪能であった。雅号は「半静」、後に「粹虚」を名乗った。彼が書画における堪能さを示す数多くの物のうち、堺市役所にある三幅対の文人画及びアサヒビール本社にある「達磨の掛け軸」は、それらを表現するものである。

逝去：明治42年(1909年)5月24日

[鳥井駒吉の辞世の句] 世の中の 地獄極楽通り過ぎ 元来し道に 帰る己が身 粹虚 <完>